



## 「地球高齢化」時代の到来と 米国・中国・インドの人口問題

中嶋 圭介

神戸市外国語大学 外国語学部・専任講師  
CSIS 戦略国際問題研究所 地球高齢化研究部・非常勤研究員

西宮市立西宮高等学校  
2011年9月1日

CSIS

CENTER FOR STRATEGIC &  
INTERNATIONAL STUDIES

公立大学法人  
神戸市外国語大学

CSIS

CENTER FOR STRATEGIC &  
INTERNATIONAL STUDIES

公立大学法人  
神戸市外国語大学

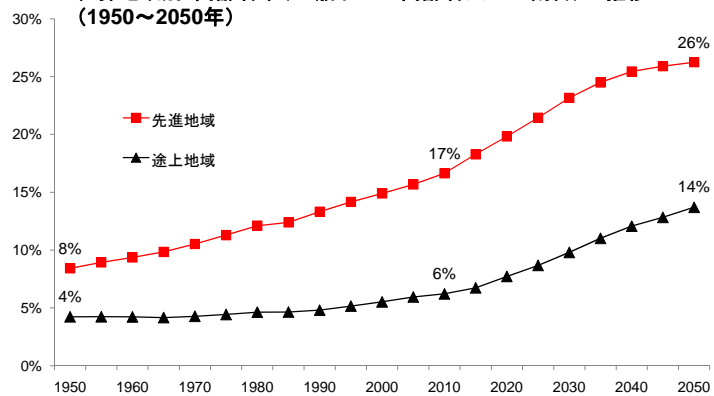
### 本日のお題

1. はじめに … 「地球高齢化」時代の到来
2. アメリカの人口動態の特殊性 … 移民要因と底堅い出生率
3. 巨大高齢国家・中国 … 「一人っ子政策」と「早期老化」
4. 人口・経済成長で中国を交わすインド … 「人口ボーナス」活用能力
5. 米国の対アジア戦略と中印の人口動態の見通し



# 1. 「地球高齢化」の到来

世界地域別・高齢者率(65歳以上の高齢者人口の割合)の推移  
(1950~2050年)



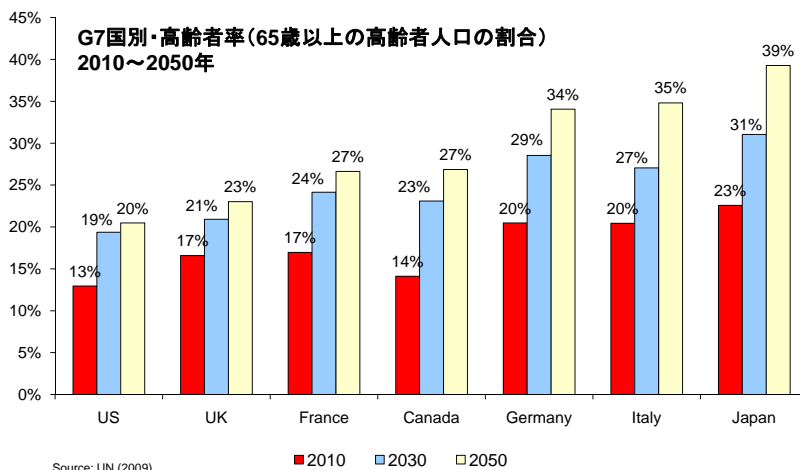
出所: UN Population Division (2011)

先進地域の合計特殊出生率と平均寿命の推移

	合計特殊出生率 (人)			平均寿命 (歳)		
	1960-65	1980-85	2005-10	1960-65	1980-85	2005-10
Canada	3.7	1.6	1.6	71.4	75.9	80.7
France	2.9	1.9	1.9	70.7	74.7	81.2
Germany	2.5	1.5	1.3	70.3	73.8	79.9
Italy	2.5	1.5	1.4	69.6	74.7	81.2
Japan	2.0	1.8	1.3	68.9	76.9	82.7
UK	2.8	1.8	1.8	70.8	74.0	79.4
US	3.3	1.8	2.1	70.0	74.3	79.2

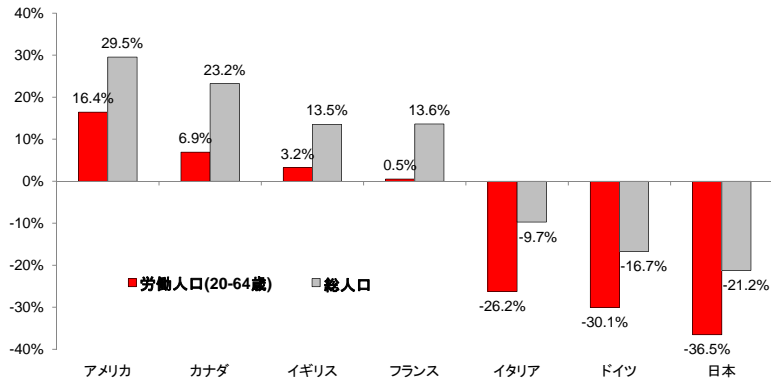
Source: UN (2009)

G7国別・高齢者率 (65歳以上の高齢者人口の割合)  
2010~2050年



Source: UN (2009)

年齢別人口・累積増加率 (2010~2050年)



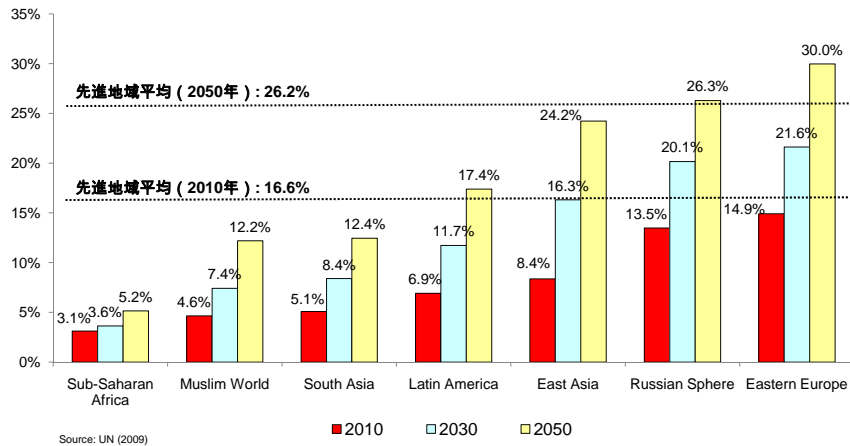
Source: UN (2011)

途上地域の合計特殊出生率と平均寿命の推移

	合計特殊出生率 (人)				平均寿命 (歳)			
	1950-55	1970-75	1990-95	2005-10	1950-55	1970-75	1990-95	2005-10
East Asia	6.0	4.7	2.0	1.7	41.3	63.2	69.0	73.2
Eastern Europe	3.1	2.4	1.7	1.4	62.3	70.0	71.3	74.9
Latin America	5.9	5.1	3.1	2.3	52.0	61.3	69.1	73.5
Muslim World	6.4	6.2	4.2	2.9	41.9	52.2	62.4	68.2
Russian Sphere	2.9	2.1	1.6	1.4	64.7	69.3	67.2	67.3
South Asia	6.0	5.4	3.8	2.7	39.3	51.4	60.3	64.9
Sub-Saharan Africa	6.6	6.7	6.1	5.2	37.9	45.5	49.9	51.7

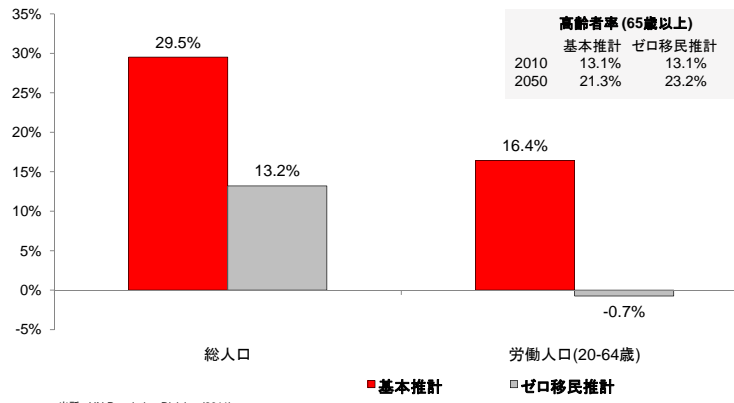
Source: UN (2009)

途上地域別・高齢者率(65歳以上)の推移(2010~2050年)

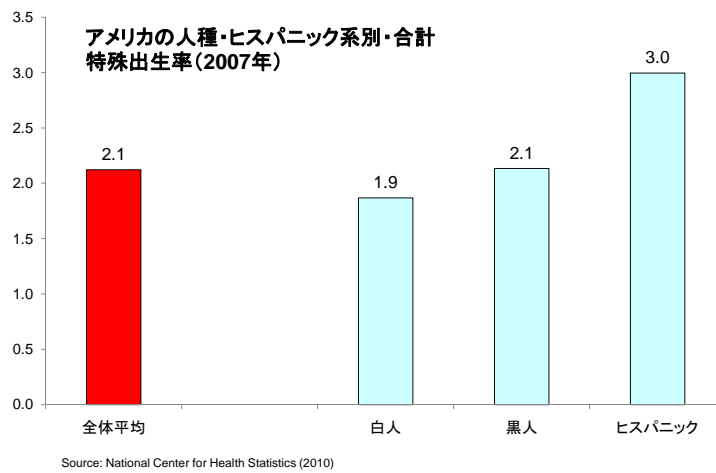


## 2. アメリカの人口動態の特殊性

アメリカの人口累積増加率 (2010~2050年)  
基本推計とゼロ移民推計の比較



アメリカの人種・ヒスパニック系別・合計  
特殊出生率 (2007年)

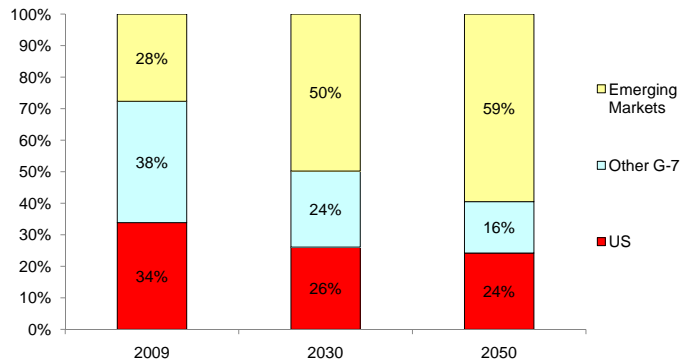


世界人口規模ランキング(1~12位、1950~2050年)

Ranking	1950	2010	2050
1	China	China	India
2	India	India	China
3	<i>US</i>	<i>US</i>	<i>US</i>
4	Russian Federation	Indonesia	Pakistan
5	<i>Japan</i>	Brazil	Nigeria
6	Indonesia	Pakistan	Indonesia
7	<i>Germany</i>	Bangladesh	Bangladesh
8	Brazil	Nigeria	Brazil
9	<i>UK</i>	Russian Federation	Ethiopia
10	<i>Italy</i>	<i>Japan</i>	Dem. Rep. Congo
11	Bangladesh	Mexico	Philippines
12	<i>France</i>	Philippines	Egypt
		<i>Germany (16)</i>	Russian Federation (14)
		<i>France (21)</i>	<i>Japan (17)</i>
		<i>UK (22)</i>	<i>UK (25)</i>
		<i>Italy (23)</i>	<i>Germany (26)</i>
			<i>France (27)</i>
			<i>Italy (32)</i>

Source: UN (2009)  
Note: Rankings for developed countries that have fallen below 12 are in parentheses.

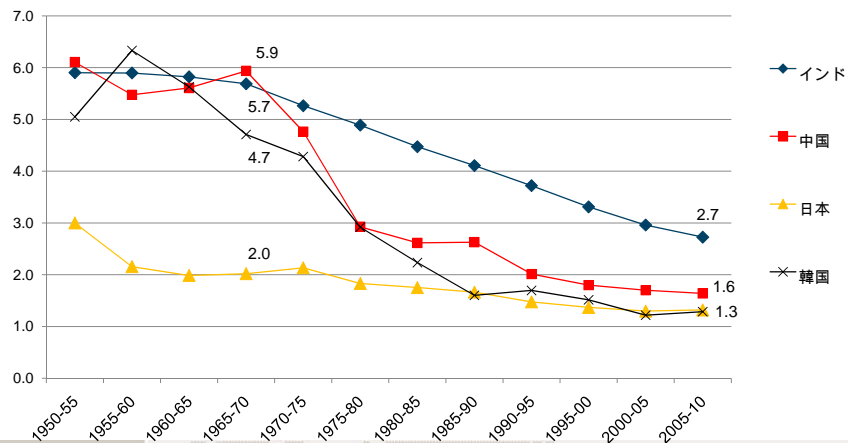
G20メンバー国全体のGDP(2005年米ドルベース)に占めるシェアの推計(2009~2050年)



Source: Uri Dadush and Bennett Stancil (2010)

### 3. 巨大高齢国家・中国

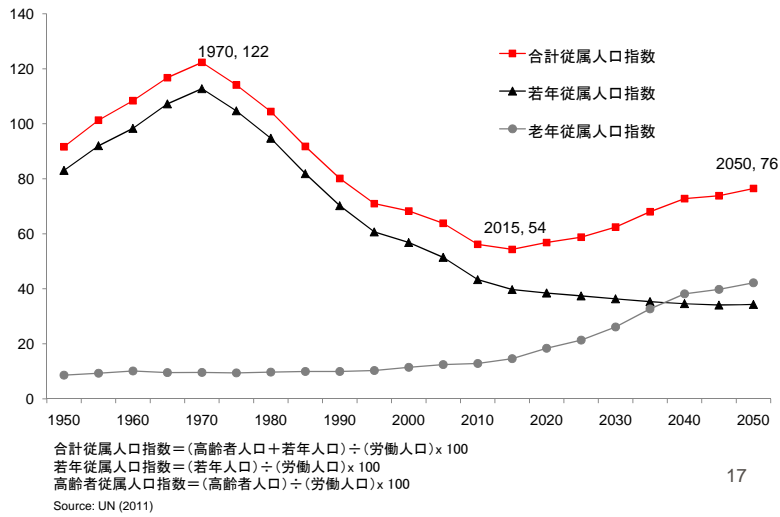
アジア主要国別・合計特殊出生率の推移(1950~2010年)



Source: UN (2011)

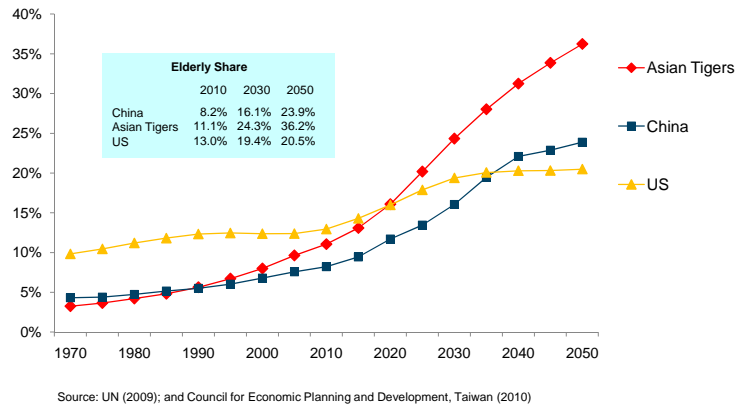


中国の従属人口指数の推移(1950~2050年)

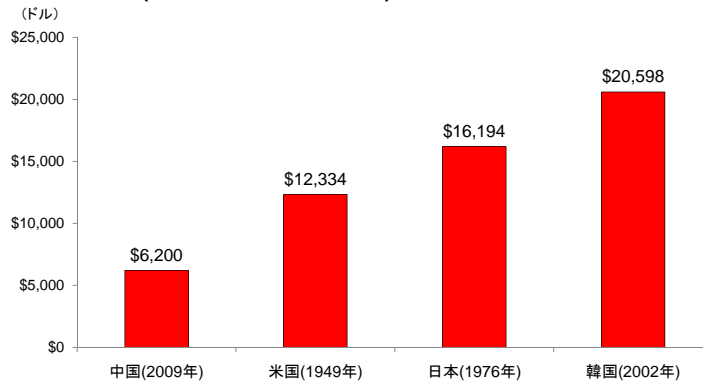


17

高齢者率の推移(1970~2050年)



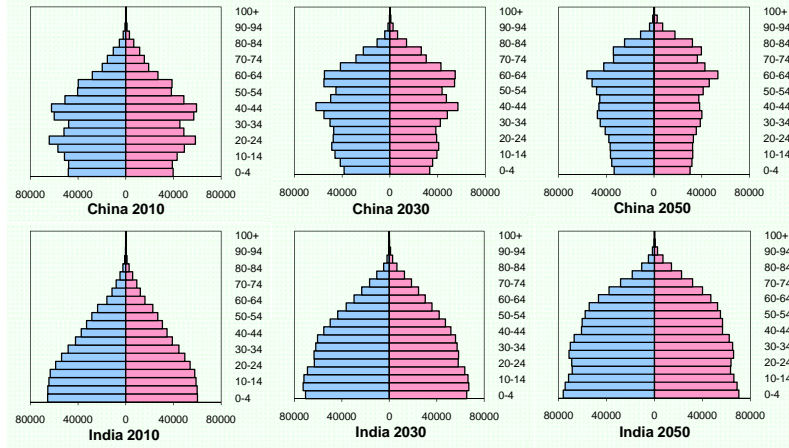
中国の2009年時点の高齢者率に等しかった年の他国の1人当たりGDP (2005年購買力平価ベース) との比較



Source: UN (2011), World Bank (2011), Angus Maddison (2010) のデータを基に中嶋作成

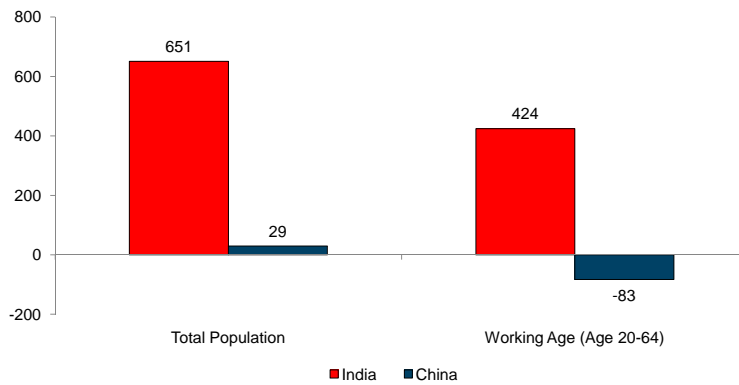
4. 人口・経済成長で中国を交わすインド

Population Pyramids of China and India in 2010, 2030, and 2050

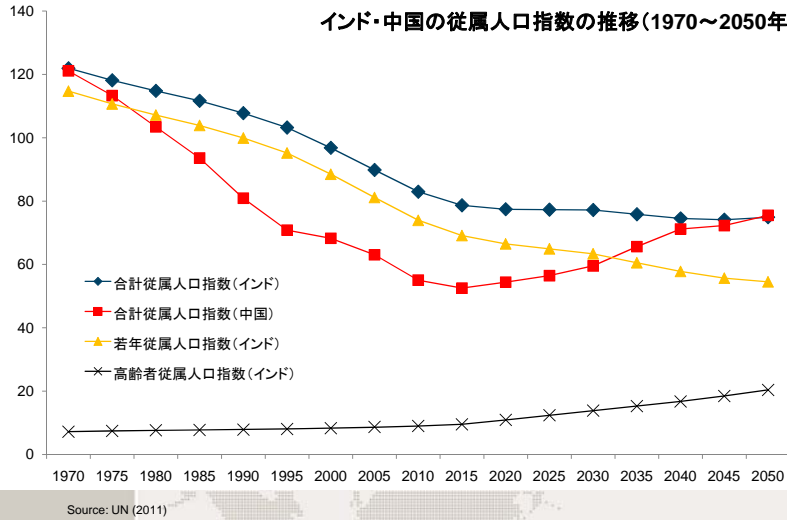


Source: UN (2009)

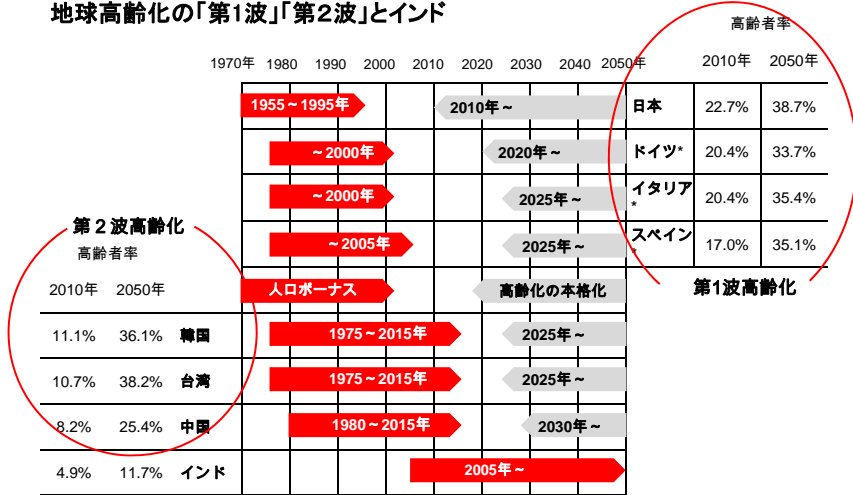
Change in the Population of India and China, in Millions: 2010–2050



インド・中国の従属人口指数の推移(1970~2050年)



地球高齢化の「第1波」「第2波」とインド



## 5. 米国の対アジア戦略と中印の人口動態の見通し

### 中国・インドの経済・地政学的発展軌道の読み方

- **ビジネス戦略の視点** … 中国の成長減速を見越して生産・販売・投資の重心シフトの受け皿として期待されるインドのポテンシャルを測る。
- **経済・外交戦略の視点** … 米国として、**中国に対しては**、過去数十年の急速な工業化、都市化、近代化の中で中国に蓄積してきた「社会的ストレス解消」「ガス抜き」を助けることが、中国の経済社会の安定性と共産党リーダーシップの政治的正当性を維持するのに役立つ。一方の**インドに対しては**、人口ボーナスの「活用能力」強化を助けてやることで、中国の成長減速に対する世界経済のリスクヘッジとして役立つ。これらは、ひいては米国の国家的経済・外交利益にもかなう。
- **地政学的戦略の視点** … **中国に対しては**、共産党の政治的正当性が危うくなる事態になれば、国内・対外の問題鎮静化に対して態度を硬化、権威主義的性質の強い体制へ揺り戻しが起こる可能性が懸念される。上述のような経済・外交面で「ガス抜き」で協調することは、こうしたシナリオ回避に役立つ。一方のインドに対しては、中国リスクに対するヘッジである。米国にとって、他の友好・同盟国の相対的低迷が予測される中、同じ英語を母語とし、民主主義の価値観を共有するインドへの期待と信頼感は、日本で一般的に認識されている以上に高い。



## biographical sketch

### 中嶋 圭介 (Nakashima, Keisuke)

神戸市外国語大学 外国語学部 法系商コース 専任講師 (神戸)

リコー経済社会研究所 社会構造部 客員主任研究員 (東京)

CSIS 戦略国際問題研究所 地球高齢化部 非常勤研究員 (米ワシントン)

#### ■ オーストラリア: ブリスベン

1976年兵庫県豊岡市生まれ。神戸市在住。人生の転機になったのは、中学2年の春、英語担任の先生にオセアニア交流協会親善大使の選考試験の受験を勧められたこと。その夏、オーストラリア・ニュージーランドを表敬訪問。滞在の一番長かったブリスベン市のホストファミリーがとてもいい人で、「言葉や文化が違っていても同じ人であることに変わりはない」という思いや、海外への漠然とした関心を持つ。ホストとの別れは何とか耐えたが、オーストラリアを発つ飛行機の中で少し涙。

#### ■ 米国: ボストン

1997～98年(一年間)、神戸外大を休学して米国ボストンへ留学。ニューベリー大学で社会学専攻。帰国が迫ったある日、両親に外大から米国の大学への転籍をほのめかしたことがある。ホストファミリー宅に両親から国際電話が掛かってきたのは、後にも先にもこのとき限り。「将来少しでも日本で働く気があるのなら、日本の大学を卒業しておきなさい。米国で勉強したいなら修士を考えれば？」その言葉に素直に従った。日本で学んでおくべきだったと多くのことを痛感していたことも理由の一つ。人生二つ目の転機。後の米大学院進学を決めた時でもある。

#### ■ 米国: シラキュース (NY)・ワシントン (DC)

一旦帰国して、神戸外大を卒業。2000年5月、改めて渡米。シラキュース大学行政大学院より修士号取得(国際関係学)。在学中より、ワシントンDCの民間・非営利の政策シンクタンク、CSIS 戦略国際問題研究所・地球高齢化部で研修生を務める。大学院卒業まもなく、研究助手として正式に入所、世界の人口問題(地球高齢化)の専門家として修行を積む。2011年3月、留学から研究生生活まで通算11年に渡ったアメリカ滞在を締めくくり、日本へ帰国。

#### ■ 神戸・東京

2011年4月、神戸市外国語大学・外国語学部・法経商コースの専任講師に就任。専門である世界的高齢化が財政、経済、社会、国際関係に与える影響の分析や政策的解決方法について卒論指導(ゼミ)をする一方で、グローバル時事を扱う専攻英語(講読)、国際ビジネス・コミュニケーション(旧商業英語)を担当。東京ではリコー経済社会研究所客員主任研究員、ワシントンDCではCSIS非常勤研究員を兼務する。